

戦前期日本におけるマルセル・デュシャンの受容について

平芳 幸浩（京都工芸繊維大学）

本発表は、マルセル・デュシャン（1887-1968）が日本の美術界においてどのように受容され解釈され援用されてきたか、その様態の変遷を考察する研究の第一期にあたるものである。大正末期から昭和 10 年代までの美術ジャーナリズムにおける海外動向の紹介、美術批評家や美術作家が展開した当時の現代芸術論、キュビズム、ダダ、シュルレアリスムなどの最新動向に触れて独自に国内で展開された当時の作品群の実態を調査検討することで、戦前期日本の美術界におけるデュシャンの受容様態の内実と限界を明らかにする。

発表者は以前、同時期のデュシャン受容について瀧口修造の例を中心に検討を加え論考にまとめたことがある（「日本におけるマルセル・デュシャン受容-瀧口修造を中心に-」『美術フォーラム 21』Vol.23, 2011 年）。瀧口は日本において最初にデュシャンに注目した人物として知られるが、瀧口によるデュシャン理解もまた、戦前期と戦後では落差があることが明らかとなった。今回の発表では、瀧口による注目も含めながら、デュシャン受容の限界を戦前期日本の美術界における関心のベクトルの問題として捉え直してみたいと考えている。

この時代は大正期新興美術に見られるように、20 世紀初頭のヨーロッパ前衛芸術の様式が一気に流入し、様々に咀嚼され展開されようとしてきた時代であった。デュシャンの名もいくつかの情報とともにこの時期に輸入されることとなる。しかし、美術雑誌での紹介、森口多里や神原泰などの批評家や作家たちの言説に登場するデュシャンの位置は、マティスやピカソのようには明瞭でない。逆にデュシャンを巡る言説で端的に現われているのは、彼の名がある主義や動向の例証として使用される傾向が強いということである。つまり、ゴッホ、セザンヌ、ピカソなどのように、個としての芸術家の生き様や表現が様式や主義を生み出すのではなく、そのような様式や主義の下にぶら下がる存在として常に認知されてきたということである。それゆえ、ある時はキュビストであり、ある時はダダイストであり、またある時はシュルレアリストであるデュシャンが、その都度立ち現われることとなる。

このようなデュシャン受容の曖昧な在り方は、欧米でのデュシャン理解の揺らぎの反映でもあるが、同時に当時の日本の美術界における関心の在り方を逆照射してもいる。つねに欧米の最新「絵画」を吸収しようとしていた美術界に対して、1918 年（大正 7 年）にはすでに絵画を放棄してしまっていたデュシャンは何ら新しい様式を提供することはなかった。デュシャンが絵画以外で実践していたことは、それが絵画でも彫刻でもなかったがゆえに、ダダやシュルレアリスムの例証とはなりえても、積極的に吸収し展開すべき「美術」とはならなかったのである。